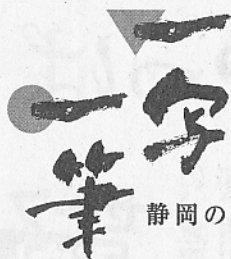


茶どころ 装い新た



開花の早かった今年のサクラは、散るのも早かった。

散ったサクラの後は菜の花や柿若葉などの出番で、ピンク一色だった山野は明るい黄色や緑に衣替える。薫風に揺れる花々には

チヨウやミツバチが飛び交い、一年で最もすがすがしい季節を迎える。

この季節に静岡を代表する若葉といえば、お茶の新芽だろう。本格的な茶摘みシーズンの前に、茶産地・牧之原台地に「ふじのくに茶の都ミュージアム」(熊倉功夫館長)が3月24日開館した。約1万9千平方メートルの敷地に3階建てのお茶博

物館、2階建ての商業館、茶室、庭園などもある。近くの静岡空港を使う外国人観光客の来館を見込み、英語、中国語、韓国語のガイドブックや音声ガイドも備え、静岡ならではの「お茶の殿堂」である。

この殿堂、実は旧金谷町が建てた「お茶の郷」を町村合併で島田市が「お茶の郷博物館」として運営していたが、それを県が買い取り約11億円かけてリニューアルした。県は、茶産業とお茶にまつわる文化を一体化して世界に発信する拠点にし、静岡茶の振興を図りたいとしている。

「茶の都」に近い静岡空港でもリニューアルが進んでいる。空港ターミナルビルの西側に新国内線ターミナルを増築、4月10日から供用を始めた。空港運営を巡っても県は3月28日に運営権譲渡の優先交渉権者を選定したと発表、2019年度に空港の運営を民間に委ねるといふ。静岡空港も開港から10年で施設や運営を大きく変える。

「お茶の静岡」を代表する牧之原台地の茶畑は、二十四節気の「穀雨」(4月20日)が過ぎるころ新芽が出そう。島田、金谷地域の今年の新茶初取引は、例年より1週間早い18日と決まった。

日本一の茶畑も、そのころは鮮やかな萌黄色にリニューアルされている。

(前静岡県監査委員・富永久雄)



菜の花とミツバチ=静岡市清水区、全日写連・小林一久さん撮影